台湾に学ぶ復興震災計画
―阪神・淡路 - 台湾 - 中越 - 東北をつなぐコミュニティ復興の試み―

国立雲林科技大学教授
黄　　世輝

黄世輝（Hwang Shyh-Huei　ファン　シーフェイ）

1960 年生まれ。1982 年国立成功大学工業設計系卒業。1988 年筑波大学芸術学（生産設計専攻）修士修了。1997 年千葉大学自然科学（設計科学専攻）学術博士取得。1997 年より国立雲林科技大学工業設計系所助理教授、2000 年より副教授。2006 年国立雲林科技大学創意生活設計系系主任兼副教授。2009 年より国立雲林科技大学創意生活設計系副教授、現在に至る。

その他、台灣省手工業研究所技術組研究人員（1997.04~1997.07）、国立科学工藝博物館籌備處展示組助理研究員（1988.05~1994.03）、羽田機械公司工業設計組助理工程師（1984.07~1985.03）

震災の経験のキャッチボール

司会 今日は、台湾から黄世輝先生をお招きして講演会を開催することとなりました。黄先生は 1960 年台湾市生まれ、現在雲林県にお住まいです。国立成功大学工業設計系を卒業された後に、筑波大学大学院芸術学修士を取得、その後、博物館に勤務されました。その時期台湾でもまちづくりが盛んになり、その流れを受け、千葉大学大学院自然科学学の学術博士を取得されました。

文化資産の保存や産業設計、文化デザインやまちづくりなど台湾におけるコミュニティデザイン分野で幅広い研究・実践・活動を展開されています。中央政府の委員も歴任されており、産官学民に幅広いネットワークをもっていらっしゃいます。千葉大学在学中は、宮崎清先生の下で、東北や中部をはじめ日本各地の農山村を調査されています。宮崎先生の教えは「野に出て生活を学ぶ」という作業を重ねることで、デザインとは生活提案であり、生活提案を行うには暮らしの現場から直に学ばなくてはならないという教えを受け、先生自身も台湾で学生とともにフィールドに出て実践と研究を重ねていらっしゃいます。

龍谷大学 LORC（地域公共人材・政策開発リサーチセンター）で「東アジアから中山間地域の内発的発展を考える」というテーマでシンポジウムを開催し、黄先生をお招きしました。中山間地域では、過疎が進行し「限界集落」という言葉が象徴するように、今後持続するには困難な状況を抱えていますが、そうした状況のなかで中山間地域がどのように人間の営みができる場として持続していくことができるかというのは、日本だけではなく近代化を経た東アジアの国、地域にあって、避けて通れない課題です。LORC ではそのことを共通テーマとして、台湾、韓国、中国と、日本は北海道からパネリストをお招きし、シンポジウムを開催しました。

今日はそれにプラスして、「台湾に学ぶ復興計画」を講演テーマとして企画しました。

実は、台湾においても1999年に大きな地震があり、その復興活動に黄先生が関わってこられました。先生は長く日本にいらっしゃったので、阪神・淡路大震災の経験が台湾での復興活動に生かされていると聞きました。大都会の神戸と先生が計画をされた中山間部の状況はまったく違う中でどのように参考になったのか、これは聞かせていただきたいと思います。

また、台湾の経験が逆に新潟の中越地震の中で山古志村の復興の参考事例になるということで、先生の日本の経験が台湾に持ち帰られ、台湾での経験がふたたび日本の戻ってくるという、海を越えた、国境を越えた震災復興をめぐる経験交流が展開されたわけです。このNPO・地方行政研究コースは「グローカル」という言葉を使いながら、国際化と地域化を結びあわせ、新しい地域社会をつくることをめざしています。そうした発想が、黄先生の震災を契機とした復興計画に生かされているということもあり、ご講演をお願いしました。よろしくお願いします。

社区＝コミュニティを舞台に

黄 皆さんこんにちは。先生からとてもいい紹介をいただきました。今日、私の経験を紹介しますが、ご参考になさってください。

震災に関することを紹介する前に、私がやってきたことをまず紹介します。

私の大学では、できれば学生をコミュニティの現場に行かせ、コミュニティの人のために少しサービスをしてあげるということを推奨しています。私の授業では、学生を連れてコミュニティ、村や過疎の農村に行って、一緒に調査をしたりするのですが、その経験を整理してくださいといわれ、今、お見せしているパワーポイントを作りました。

まず、台湾には「社区」という言葉があります。「コミュニティ」の意味です。台湾では1950年ごろからすでにある言葉です。

地域でサービスをするために、誰が参加するかですが、学生の専攻が違う場合は、地域に入って何ができるかを学生に聞いてみます。コミュニティの中には、いろいろな人の能力が必要ですから、誰でも地域に入っていいのです。たとえば、子どもにコンピューターを教えてあげるには、情報工学を学ぶ人が参加できるでしょう。また、たとえば地域にあるいろいろな農産品を紹介するにはホームページをつくったらどうか、となりますと、ページデザインはデザイン学科の学生が得意だということもあるでしょう。あるいは、地域にはいろいろな製品があって、その製品のパッケージデザインをよくすれば、その製品をお土産として販売することもできるでしょう。学生のなかにビジュアルデザイン専攻の人がいれば、パッケージデザインの仕事ができます。ほかにも地域に古い建物がある場合や、地域の中に、政府から補助金をもらって、地域の公共スペースに小さな建物を建て、住民の交流空間を作るときには、建築学科の学生は地域に入って、地域の住民と一緒に、小さな建物を建てることができるでしょう。

また、台湾には社区発展協会という民間組織、NPO組織があります。それぞれの村や農産所が社区発展協会という民間の組織をつくることができます。政府の補助金をもらう、あるいは政府の補助金なしでも、地域のためにいろんな仕事をする組織です。

そのような組織は基本的には貧乏です。そのうえ人手不足です。ですから、大学の学生がその地域に行ってNPO組織の手伝いをす

る。あるいはその地域のイベントや、特産品がある場合、販売方法を考えるときには経営学部の学生がいろんな知恵を出すことができます。このように大学の学部にかかわらず、だれでも地域に入っていいのです。ただし、地域に入っていろいろ食べたり、遊んだり、仕事をしないといけません。

多くの方から学びを得て

私は1994年に千葉大学に行ったときに、地域づくりについて勉強し始めました。いろんな先生が教えてくれました。宮崎先生は藁に関する本を3冊くらい執筆されています。藁という字は、草かんむりに「高」と「木」と書きます。藁というのは木よりも高い価値を持っていると思っている草だとおっしゃるのです。面白い解釈ですよね。たしかにいろいろな用途があります。伝統工芸のなかに藁ぞうりやいろいろな民具などがあります。

この指導教官は私を日本のいろいろな地域を見に連れて行ってくださいました。福島県大沼郡三島町の齋藤茂樹さんは、最初に出会ったときは企画課長をされて、去年まで町長されていました。三島町の中にはいろいろと地域資源があります。藁はもちろん、ケヤキの木でつくる木工や、草で編んだ手提げなどがあります。そこで勉強したのは、日本の農村にはいろいろな自然の材料があり、その自然を生かして、人間の生活に必要なものをつくっているということです。

東京を見ると、とてもにぎやかでいろいろなものがあるのですが、日本の田舎にはいろいろなものがあるのです。田舎だけれど、実はとても豊かなところだと宮崎先生から学びました。

千葉大学の木下勇先生は、私が1997年に博士号をとって卒業したあとに、台湾に来てまちづくりゲームを教えてくださいました。皆が一緒に参加型の遊びをしながら12、3人でやるものです。アメリカの都市計画の専門家が発明した参加型の遊びがあって、この写真は、木下先生と浅見泰司先生、東京都の世田谷区のまちづくりセンターの職員です。浅見先生はアメリカに行っていろいろなまちづくりのゲームを勉強したのですが、世田谷区でもまちづくりをするときには住民参加の手法で人々を呼びかけ、一緒に遊びながら都市計画をやりました。そのような手法を1997年に台湾に紹介しました。そのときに参加して一緒に勉強したのです。山本香苗さんも参加しました。

台湾の華蓮は老人が多いところです。昔は山の木を切り倒し、運んで工事をしていたのですが、定年になってから仕事がありません。ある先生は、皆の手は木とよくなじんでいるので、版画を作ってみないかといって、版画を作り始めました。昔は木を切る専門家でしたが、次は木を彫刻する専門家、専門家まではいかなくても、木を切って版画にしたり、山本香苗さんも日本の中でそのようなことがあるとおっしゃっていましたが、中国の晏という方は1920年代にアメリカに留学して、フランスに行って、そしてフランスの中国人の権利を維持するためにいろいろがんばったのです。彼の分析によれば、中国はなぜ弱い国になったか、それは中国の農民たちはあまりにも知識を持っていない、そして、自分のことしか考えない。他の人のために仕事をしないという欠点がある。それを分析して、社会教育、普通の公務員の教育をやろうと考えた先生です。

そして、宮沢賢治です。皆さんは「風にも負けず」などを知っていると思いますが、と

ても面白い人ですね。東北には宮沢賢治の記念館があり、童話村もあるんです。宮沢賢治のために記念館や童話村、それに盛岡市の市内の材木町の道路際に宮沢賢治の小説の登場人物の彫刻がおいてあります。なぜ、そんなに皆さんが宮沢賢治を愛しているのか調べてみると、1920年代に宮沢賢治は農民のために肥料の使い方などを教え、文芸に関することも教えていた。こちらの方はバングラディシュで農村銀行システムを作ったユヌスです。これらの方は地域のためにいろいろ考えた人たちです。会ったことのない先生もいますが、皆、私の先生です。

日本の伝統工芸を台湾に伝える

日本では、それぞれの地域に伝統的な工芸があります。たとえば、新潟県山北町の木の皮を使った織物。これは今もつくっています。福島県三島町では、山の野生のぶどうのつるを処理して編んでいます。とても強いものです。山形県福島町の稲草細工もあります。このように日本の農村部にはすばらしい工芸品があります。それを1995年、台湾に紹介しました。

日本にはいろいろなまちづくりをしているいい農村があるということで、5つの農村を紹介しました。1997年には他の5つの事例を紹介しました。それが台湾にとって大きな影響を与えました。まちづくりって何、地域の住民が自分のために、自分の村のために、子どものために、老人のために、地域の資源を発見して、地域の資源を生かして、地域づくりをやっています。

これは千葉県館山市の扇子を作る工芸です。東京都でさえ少し離れれば、藁で大きな蛇をつくっています。長さ15m以上の蛇を藁で作って、それをかついで、ある木の上においておくのです。そのような慣習があるのです。日本にもいろいろな民俗文化があるのです。

いろいろな事例が台湾で紹介されましたが、三島町に行ったとき、無人の販売所がありました。100円を置く小さな皿があって、すごいと思いました。誰もいないのに盗まれないのです。こんなことを台湾の人に説明すると、「信じられない」「ありえない」と言います。なぜ日本ではできるのでしょうか。三島町の工人まつりをみると手作りをできる人はたくさんいます。三島町生活工芸館という博物館ができていて体験もできます。これを台湾に紹介しました。

台湾の人はどうしたらいいか、ひとつの町の中にもいろいろな資源があります。わたしたちも自分の町の中の資源をさがしてみようというところからまちづくり運動がはじまりました。

足助町は名古屋の近くにある町です。当時の町長は矢沢長介さん。お酒の好きな方でした。1970年代の古い町並みの保存をしていた地域です。そして古い建物を生かして旅館にしたり、面白いのは、きれいな百年荘という旅館があって、旅館の中に2つの工房があるのですが、ひとつはZiZi工房。豚の肝の煮物を作っています。もうひとつのバーバラハウスはおばあちゃんたちがパンを作っています。パンと豚肉は旅館百年荘のフランス料理にも使われています。そして、旅館の下には温泉があり、矢沢町長にどうしてこのような複合体をつくったのか聞いたところ、ホテルの真ん中に老人たちがいて、医者が来る。実際にそこに泊まって、お風呂に入ると、何人かの老人がいて、お話ししました。外から来る若者たちと老人とが話す機会をつく

ったのです。

これは中富町。富士山のふもとにあるまちで、2つの工芸があります。手漉き紙と石彫刻です。日本の中にはたくさんの短歌や俳句を書く人がいますが、このまちの人はあなたが短歌や俳句が好きで、あなたの短歌や俳句を私たちのまちに残したいのならば、お金をいただいて、石の彫刻をつくる、短歌を彫刻に刻むというのです。できた石碑は手漉き紙で写し取って、短歌を書いた人に送ります。たくさんの人が彫ってもらっていたのです。そして、お金をもらい、彫刻をし、石碑の里と言われています。台湾の人に見せたとき、とてもびっくりされました。台湾のお墓と同じ状態だからです。日本のお墓とは違う形ですが、台湾の人はお墓に見える。このような10の事例を台湾に紹介しました。

子どもを巻き込む

日本では自分の町や村のために、地域の資源を生かしてがんばっていると思ったのです。台湾の人も同じことができないかと、台湾は1994年からまちづくり、地域つくりをやり始めたのです。17年くらいたちましたが、今も続けています。日本人は私たちの先生です。

私は1997年に卒業して台湾に戻り、今の大学に教師として働いています。そして、よく学生と一緒に地域に行きます。地域に行く前に学生と相談します。地域がどんな問題に直面しているのか、地域にどんな資源があるのか、そして、地域の人々と協働できないのか、異なる視点で地域を見ることはできないのかと。そして、一緒に行くのです。

最初に行ったのは雲林県の小さな村でした。地域の資源を探しながら、学生に一つお願いをしました。あなたたちが地域に行って、もし資源を発見したら、それをゲームに変えて、そこの子どもたちと一緒にやってみないかと。この地域にはいろいろな野菜がありました。でも、子どもたちにその野菜の名前は何か聞いてみると、野菜を栽培している地域の子どもたちにもかかわらず野菜の名前をわからない。お母さんたちが野菜を一生懸命育てているのですが、子どもたちは野菜の名前すらわかりません。野菜の名前をわかるために、ゲームを作りました。そして、地図を作りました。子どもたちが自分の家を確認でき、川の位置も確認できるようなものです。まず、学生が模型を作ります。川の模型を作ります。地域に行って調査をして、子どもを呼んできます。

まず、電信柱の模型など、いろいろな小さな模型を作って、仕掛けのある板の上において、子どもが来ると、板の上の紙を破って、中の模型を取り出し、子どもたちがその置き場所を決めます。なぜこの遊びをしたのかというと、町へ行って感じたのは、川が汚いということでした。でも、住民たちはそのことを感じていません。子どもたちもです。そこで、このゲームをやってみたのです。

住民の家の前に溝があるのですが、この溝を封じるか、封じないほうがいいか検討していました。なぜ封じないかというと、全部閉めると掃除がしにくいからです。でも、ふたがないと子どもが落ちやすくて危険です。検討した結果、地域に竹がたくさんあり、竹工芸のできる住民がいるので、竹を組み合わせてカバーを作ったのです。これは掃除のときに取ることもできます。

小学生も一緒にデザインします。まず、小学校で先生と検討して、小学校の中に遊び道具はいろいろあるのですが、新しい遊び道具

を作るならどのようなものがいいのか、これは先生と地図の上に検討して、学生たちに木に関する認識をさせる。これも一つのゲームです。そして、子どもたちがデザインした遊び道具はめちゃくちゃなものでしたが、面白い発想があるのです。次に模型を作りました。子どもたちの発想にしたがって、きれいに模型を作りました。そして、遊び道具を2つ3つつくったのです。つまり、住民参加の方法をやっているわけです。子どもたちでも参加できるデザインです。

必要なときには反対運動もやります。ある村は、きれいな自然があって、特別な鳥、八色鳥がいます。県庁にはこの鳥を駆除する計画がありました。ですから県庁に行って反対運動をやりました。このとき、先生たちは行きますが、学生は行きません。学生を巻き込む必要はありませんから。

反対運動だけではだめですね。地域に戻ってきて、どのような資源があるか探して、住民と一緒に地域を掃除したりするんです。また、その村に新しい橋をつくる機会があって、その橋を作るために住民たちと一緒にどのような橋を作ったらいいか、その橋の下に川があるのですが、子どもたちをつれて川を歩いて、川にこのような生き物がいるのだと紹介し、その後で子どもたちに橋の絵を書かせます。その中から投票して、どの橋の形にするか決めたのです。

先ほどの八色鳥を保護するために生態保護の運動も少し手伝いました。珍しい鳥です。県庁は山を削ろうとしていましたが、住民は反対していました。反対するには何かの理由が必要です。生き物を利用し、この生き物はとてもきれいで珍しい鳥ですので、この山はこの鳥が生きている場所ですから、ぜひその山を保存してくださいと県庁に行きました。私たちは勝ったのです。

村の中に空いている場所があって、村長さんはきれいな絵を描きたいと言ったことがありました。私は反対しましたが、ぜひ描いてほしいとのことでしたので、条件を提示しました。日本の漫画を書いたらいけないと。ドラえもんを描いても仕方ないですよね。ですので「地域の中にあるものだけを書いてください」と言いました。

そして、日本にもあると思いますが、小さな公園を作るときには外注しないで、住民たちが手をかけて公園をつくること。また、子どもたちのための生態を勉強する会を作りました。年に1回、生態に関する紹介をやっていたのです。

紅茶で復興まちづくり

1997年に台湾に戻り、1999年に台湾で地震が起こりました。1995年は阪神淡路大震災が起こり、そのときに私は千葉大学にいたのですが、少し揺れを感じました。あとになって阪神淡路で大きな地震があったと知りました。1999年の台湾の地震は、夜中の1時47分にゆれ始めました。私の家の後の12階建ての建物が壊れて、ある女性が「助けてください」と大きな声で言いました。私の子の先生ではないですか。次に揺れが静かになり、子どもが起き、早く逃げようと家族全部で1階に逃げて、門を出たら、またゆれ始めました。私たちが住んでいる12階の建物が全壊したのです。とても怖かったです。

そのあとに、復興まちづくりのことをやり始めたのです。1999年でした。最初に台湾の有名な観光地で渋水という村に呼ばれ、地域資源の調査をしました。

地域では2つ資源がありました。一つは紅

茶生産、もう一つは陶磁器生産でした。最初に見に行ったときにはいろいろな陶磁器を見ましたが、釜はないのです。10年前にすでに釜を壊して、もう陶磁器はやらないということでした。村の中に陶磁器の専門家はいないか確認したところ、いるのですが、もう定年を迎えていてやっていない。

そして、紅茶はあとでデザインをしたのですが、紅茶もあるのです。最初に紅茶を見に行ったときには、ビンロウの木がたくさん生えていました。台湾の人は木の実から赤い汁が出てくるのですが、その汁をチューインガムを噛むように食べるのです。昔はたとえば結婚のときのお土産としてあげました。この木の下に紅茶の木がありました。

この地域の人はよくがんばっているんです。下で紅茶の木、上にはビンロウの木の実をとっているんですから。あとで聞いてみると、紅茶の葉はぜんぜんとらなくて、ビンロウの実だけとっていて、そんなにがんばっているわけではないと言うのです。

昔、台湾の日本領有時代の1895年から1945年の50年間は、日本人はインドの紅茶の木を台湾に持ってきて栽培し、お茶の試験所をつくって、イギリスなどに輸出していました。イギリスの新聞に「台湾の紅茶の質はいい」と載っていたこともあります。80年前のことです。

なぜ、紅茶の葉を取らないかと聞きました。売れ行きのいい時期に悪い質のものを入れて販売したところ、その紅茶を飲んだイギリス人は、あまりおいしくないということで、注文しなくなり、売れないので紅茶の葉を取らないということになったそうです。そんなことをしていたのです。

その歴史がわかったので、地域の住民に聞いてみました。「大昔のような質のいい紅茶を作らないのですか」と。何人かの農民から「もう一度、大昔の立派な紅茶を作りたい」と反応がありました。そして、私たちは少し手伝いました。紅茶ができたらどのようなロゴがいいか住民たちに書いてもらって、それから学生たちが描いて、3つの案に絞りました。森林紅茶という名前もみんなで投票し、パッケージも決めました。パッケージだけではだめですね、紅茶も栽培して、紅茶の工場をつくらなくてはならないです。台湾の行政院に補助金を申請し、150万元、日本円で400万、500万円くらいの補助金をもらって、紅茶工場をつくりました。パッケージもでき、販売し始めました。宣伝のためにつくったパッケージでは、復興まちづくりの物語を書いて、真ん中に紅茶を入れて宣伝にしました。うまくいっているようです。紅茶は1000元くらいで販売しています。

他の村も紅茶を作り始めています。だんだん価格が上がり、5000元までになりました。農民たちも悩んでいます。紅茶を作ることはできますが、販売は得意ではありません。復興まちづくりを手伝った先生たちは、一人10万元ずつだして、紅茶を販売するための小さな会社を作りました。

また、南投県の竹山という竹の有名な地域には、いろいろな種類の竹があります。この竹を生かして、いろいろなデザインをしました。ペンたてやクリップ置きなどです。

桃米村はカエルで復興を

桃米村のことも少し紹介します。復興まちづくりのときに、一つテーマがありました。カエルです。農村ですから、若者は出稼ぎに行きます。村にいません。しかし、地震が起きてから村に戻ってきました。自宅の修理の

ために戻ってきたのです。戻ってきたら農村の中で続けて生活していけるかと考えます。ある一人の若者は、村を出るときに二度と村に戻ってこないと誓っていましたが、地震が起こり戻ってきていました。

この村をカエルの生態村にしようということになりました。初めは多くの人が勉強会に参加しましたが、1年後には20人になっていました。カエルのことを教える先生がすごいのです。車を運転してくるのですが、村の前で車を止めて、歩いて村に入るのです。歩いて、たくさんの村人の家の前を通って、家の戸をノックして、「授業ですよ」と誘って授業をするのです。授業を聞いているうちに、カエルっていろんな種類があり、形も鳴き声も違い、かわいくて面白いという気持ちになってくるのです。1年の最後に試験があって、村のカエルを捕まえて、カエルの説明をしてくださいという試験がありました。「鳴き声は」「オスかメスか」などの質問があります。結局9人が合格し、生態解説委員になりました。

震災地ではなくても他のまちづくりをやっている人が見学にやってきます。そこに生態解説委員が解説します。他のまちや村の人が来ると、カエルもいろいろな種類もあると解説してお金も徴収します。午前で1500台湾元、日本円で4500円くらいです。1500元の中の一部はまちの協会、民間組織に寄付をしています。台湾では有名なカエルの村です。このように復興まちづくりをやっているところもあります。

台湾に必要な行政の力

台湾政府は、復興まちづくりは大切な仕事だと考えています。震災地がとても広大ですから専門家にお願いして、まちづくりセンターをつくることを提案しました。そして、日本の事例として、垂水のまちづくりセンター、世田谷区のまちづくりセンターなどへ見学に行きました。

日本にはまちづくりセンターが30ヶ所以上あります。台湾にもまちづくりセンターをつくって、復興まちづくりに協力してはどうかということで、台湾政府は4つのまちづくりセンターをつくりました。台湾の真ん中あたりで4つの地域にわけ、それぞれ民間組織にお願いしました。

私がその中の第3地域まちづくりセンターを担当し、1年におよそ15の村に協力して、それを2年連続でやりました。2年目に政府と話し合いました。15の村を見るのは疲れますと。私が担当する地域は4つの県にわたっています。南東県などです。毎回車を運転していくのは時間もかかり大変でした。このようなやりかたでは長く続かない。4つのセンターをやめて、それぞれの県に1つのまちづくりセンターを作るようにお願いしました。

その結果、2003年にそれぞれの県にまちづくりセンターができました。私は雲林県のまちづくりを8年くらい担当しました。第3まちづくりセンターの事業設計は、まず震災地を選び、募集します。そして、村に一人、まちづくり委員の専任を雇い、村のことを手伝ってもらいます。給与は2万元、日本円で6万円くらいです。大学生の初任給は2万3000元くらいです。地域資源の調査、計画書の書き方など、その人に対してトレーニングプログラムがあります。15の村の面倒を見るのは難しいので、5グループに分けました。他の先生にも手伝ってもらって、一人の先生あたり3村に協力してもらいました。こ

のようにして、雲林県のまちづくりセンターを8年くらいやりました。

そして、一つのことがわかりました。民間組織でまちづくりを推進することには限界があるということです。私たちがいくら熱心にやっても、たくさんの村の面倒を見ることはできません。

なぜ、台湾の村がそれぞれにやらないか、なぜ、私が必要かについて一つ問題があります。台湾の村の組織には、村長さん一人と監事一人がいるだけです。日本は公務員がいますが台湾は違います。まちづくりをやりたいといってもできません。台湾の行政は村の上に郷と鎮があり、そこには公務員がいます。でも、台湾の郷と鎮の公務員はまちづくりをやりません。まちづくりとは何か、知らないのです。これは日本と台湾の差です。

日本のまちづくりは、行政の人も多いです。がんばっている公務員も多いです。さきほど紹介した、三島町や足助町などの町長や観光課長などは、自分の町の将来や、どのように町を育てていくべきかを考えています。台湾の郷、鎮、村は、まちづくりのことを知らないです。私のような人間や、地域に熱心なNPO組織がまちづくりをやっているわけです。

雲林県には418の村があります。1年に20くらいの村とまちづくりのことを考えています。8年経過しましたが、100くらいの村としか一緒に仕事ができない。このようなやり方は変えないといけないのです。

雲林県には20の郷と鎮があります。この20の郷と鎮でなぜやらないのか、それぞれの公務員を育てるべきです。もし、公務員がまちづくりの認識を持つならば、自分でやっていけばいいのですが、まだ成功していません。そのなかのいくつか、3つくらいの郷と鎮では始めています。郷と鎮に一つのまちづくりセンターを置くべきです。まちづくりセンター、社区営造中心と台湾では言うのですが、このようなセンターで一番大事なのは、エンパワーメントです。一緒になってエンパワーする、問題があった一緒に考えるということです。エンパワーということは、何か問題があったとき、私が解決するわけではなく、一緒に考えて、成長していくということです。彼らの力を育てるというのが私の仕事です。他のまちにも見学に行きます。

外の目を通して地域に力をよびおこす

大学生たちを連れて調査に行きます。山間民族、台湾の原住民へも手伝いました。阿里山の中にツォウ族がいますが、その民族は工芸をもっています。藤、萱などで工芸します。猟師はかごをもって猟をします。自分の体重よりも重いものを持つことができます。やせていても力が強い。イノシシが多い村で、村のあちこちにイノシシの彫刻がおいてあります。村には石の彫刻がうまい人もいます。村にはたくさんの工芸の専門家がいます。職人と言いますか、手作りがうまい人がたくさんいます。革の彫刻、竹細工、歌手。ツォウの言葉なので、意味がわかりませんが。そして、いろんな竹細工で新製品を開発します。院生たちも一緒に開発に加わります。楮の木、紙すきの原料になるものですが、楮の木の皮をたたいて、乾燥させ、布のようになったもので品物をつくります。日本の先生が村に行って、新しいデザインをすることもありました。

原住民は14族あり、言葉が通じないので、よくけんかもありました。ブヌン族のエコツアーの企画をしてみました。ここの仕事を6

年間やり、一緒に検討し、試してみました。パネルを作って紹介したり、商品開発をしたりしました。

大学の近くでダムの建設をしているのですが、隣の村はどうしたらいいか、生活をどうしたらいいかを考え、聞き取り調査をしました。学生たちが村のためにデザインしたものです。

地域づくりの先生と学生の役割として、もともとその地域の人ではないので、入ったら感じたことを村の人に伝えます。外の目、新鮮な視点の提供です。鏡のように地域の状態を反映します。村に入って「工芸品は素晴らしい」などと表現することによって、外の人の声がわかります。地域の内的な力を呼び起こすことも可能です。地域の人は私たちの見方を通じて、地域の人が持っているものは、外の人にとってすばらしいところがあることに気づきます。そして、地域の住民が自信をもって地域資源を生かし、そのことによって、地域の内的な力を呼び起こすことができます。

日本と台湾／人と人がつながって

最後に、先ほど紹介した、復興まちづくりのことを含めて、いったい私たちは何をしてきたかというと、日本との交流の機会が生まれました。阪神淡路大震災のあと、多くの復興まちづくりの物語があります。

神戸の垂水英司先生が台湾に来て、台湾のまちづくりについて調査をしました。私たちがいろいろ仕事をしていましたが、あまり自分で整理していませんでした。それを垂水先生が調査して、整理してくれたのです。地図もつくってくれ、日本語で本を作りました。私たちがしなかったことをやってくださって本当にありがたいことです。

先生の紹介で阪神神戸の復興まちづくりを見学しに来て、いろんな人に会い、いろんな交流がありました。新潟の中越でも、中越の人も神戸の人も台湾の人も一緒に交流しましょうということで、先の経験をもって、中越に行きました。

次に東北ですが、台湾の人は何ができるのでしょうか。まず簡単なのは、寄付をすることでした。私の恩師、宮崎清先生の教え子で博士号をとった人は10人います。

一つ重要なのは、神戸で教会が焼けてしまい、神父さんと東京大学の先生がペーパードームという教会をつくりました。紙のチューブでつくった教会です。

2005年に新故郷基金会、さきほどのカエルの村の指導者が、神戸に来て交流したときに、神戸ではペーパードームを壊して新しい教会をつくるとの話があり、それならば欲しいとのことで、紙のチューブでできた教会を神戸港まで持っていって、また、台湾に持って帰って、建て直しました。3、4年かかりました。運ぶ、組み立てるのにはお金がかかりますが、お金がありませんでした。土地も探す必要がありました。また地域の状況にあわせて、デザインをする必要がありました。

そして、2008年9月21日に再生しました。そのときは神父さんをはじめ神戸の人がたくさん来ました。もともと神戸にあったペーパードームが台湾に来たとのことで大変感動しました。私が通訳しましたが、紙のチューブはすこし損傷、水の跡があって、涙があるようですよ、と言ったのですが、神戸の人は汗と感じたそうです。

面白いことに、台湾と日本は外交関係を持っていませんが、民間の中に、このようなことを通じてちゃんとつながっているのです。

私たちはみんな地震の経験をもって、復興まちづくりをしてきました。これからも、それぞれ自分の地域でかんばって、交流をしましょう、いろいろことなる経験をもって、もっと進歩すると思います。

ありがとうございました。

地域に対する愛情をもって

司会 ありがとうございました。何かご質問がありましたらどうぞ。

質問 東日本大震災において、放射能汚染が問題として出てきました。地域が内部にもつ力、人の力を引き出すこととの関わりで、放射能物質との関係性をお教えいただきたいと思います。

黄 新故郷基金会は東北へ視察に行きました。石巻に神父さんはいます。台湾の人も手伝えることがあれば手伝います。難しいですが、その気持ちはあります。しかし、福島第一原発の 20km の範囲は行けないですね。誰も経験したことのない問題です。台湾も 4 つの原子力発電所があります。その中の一つは台北の近くにあります。台北は 700 万人います。その人たちも危ないです。

このような東北の震災津波の災害に何ができるのか。私の指導教官はあまり答えてくれませんでしたが、震災時にはいろいろな感動する物語があると。卒業式にピアノを弾く予定だった小学生の話で、親は行方不明、ピアノも汚れてしまった。それでも、地域のお母さんがピアノを掃除し、子どもはピアノを弾いたと。いくら苦しいところでも、人間としての気持ち、愛情があれば、その地域は復興すると指導教官が教えてくれました。

外来者の協力で、地域の住民や、住んでいる地域に対して、思いがあるならば、必ずふるさとに戻ることができると思います。台湾の経験では、日本に教えることができないと思いますが、期待しています。日本を見て、解決の手法を関心をもってみたいと思います。わたしは、あなたの問題に答えることができません。

［2011 年 12 月 2 日講演］